

【概況】<サウジアラビア・ロシアの自主減産年末まで延長・米石油在庫取り崩し>

●22日、ロシアは21日、旧ソ連構成国4カ国を除く全ての国を対象にガソリンとディーゼルの輸出を一時的に禁止すると発表した。同国国営パイプライン運営会社トランスネフチは22日に、バルト海と黒海の主要ターミナルであるプリモルスキーとノボロシースクへのディーゼル輸送を停止した。これを受けて、市場では原油供給不足への不安が再燃し買いが先行し相場は90.03ドルへ反発しました。

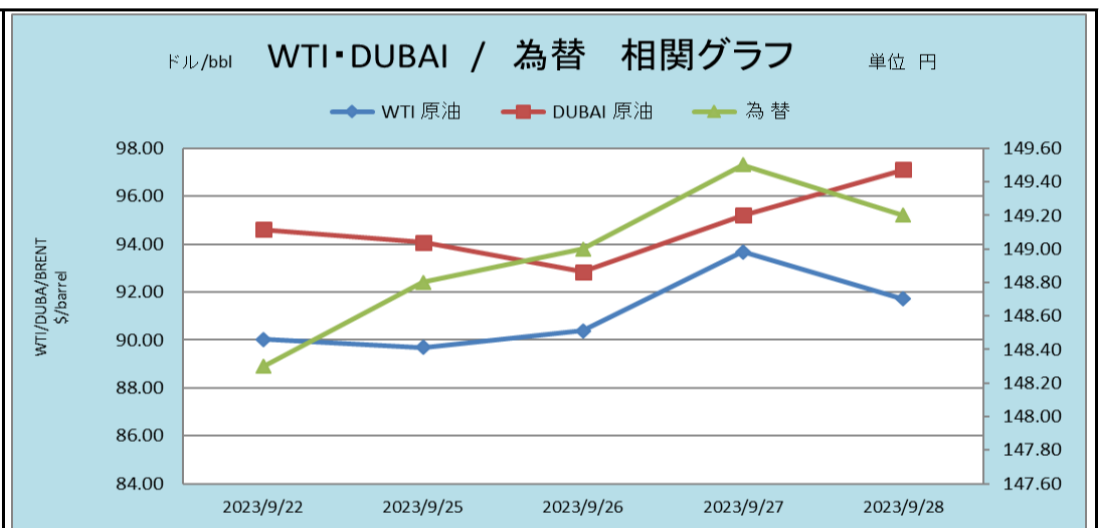
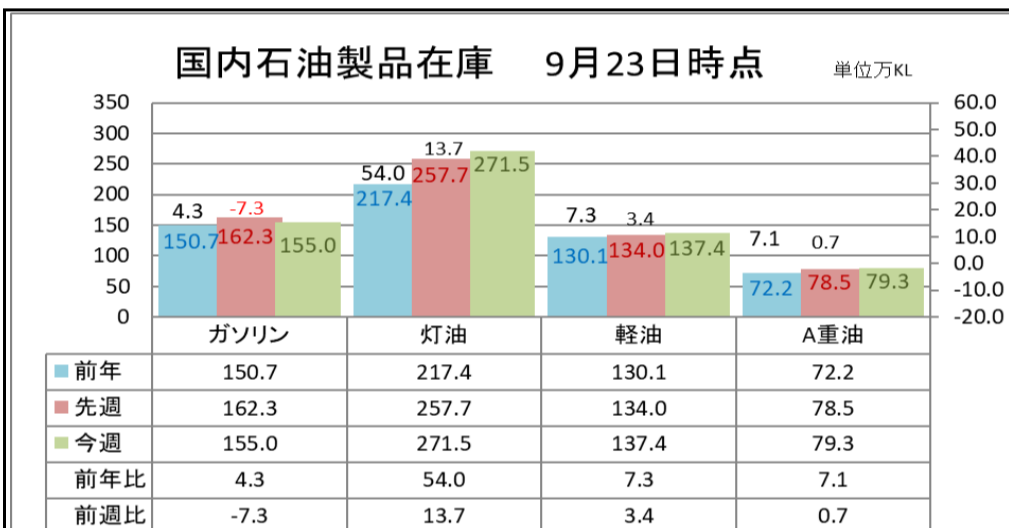
●25日、ロシア政府は21日、旧ソ連構成国4カ国以外へのガソリンとディーゼルの輸出を一時的に禁止する措置を発表していたが、25日に明らかになった政府文書では一部の船舶燃料と硫黄分の高いディーゼルの輸出が認められた。この報をきっかけに、需給逼迫への懸念が幾分和らぎ、売りが優勢となった。また、外国為替市場では対ユーロでドル高が進行し、ドル建てで取引される商品の割高感につながり、相場は89.68ドルへ反落しました。

●26日、サウジアラビアとロシアが今月初めに自主的な供給削減を年末まで延長することを決定し、市場では大幅な供給不足に陥るとの懸念が根強い。相場は朝方までマイナス圏に沈んでいた。米欧中央銀行が先週そろってインフレを抑制するため金融引き締めを維持する方針を強調。これを受けて、米長期金利が高止まりし、外国為替市場ではドル高・ユーロ安が進行。ドル建てで取引される原油は割高感に押され相場は90.39ドルへ反発しました。

●27日、米エネルギー情報局(EIA)が午前発表した22日までの1週間の米石油在庫統計によると、原油在庫は前週比220万バレル減と市場予想(ロイター通信拡大版調査)の30万バレル減を大幅に上回る取り崩しとなった。また、旺盛な製油所向けや輸出需要を背景に米オクラホマ州クッシングの原油貯蔵所の在庫は2,200万バレルと、昨年7月以来の歴史的な低水準に減少。これを受け、市場では需給引き締め観測が拡大し、相場は93.68ドルへ大幅続伸しました。

●28日、相場は27日に昨年8月下旬以来約1年1カ月ぶりの高値まで上昇しており、この日は利益確定の売りが中心となった。投資家は、原油価格の高騰が米欧の主要中央銀行の金融引き締めの長期化につながり、経済に打撃を与えることを懸念。心理的な節目である100ドルを前に高値警戒感が広がった。また、米予算審議の難航に伴い一部政府閉鎖に追い込まれるリスクが警戒される中、景気減速への懸念がくすぶり相場は91.71ドルへ反落しました。

9月29日 | 16:00現在 | WTI原油 | 91.73ドル | 為替 1ドル | 150.58円



| | 次回元売変動予測 | |
|------|----------|-----------|
| | 10/5~ | 元売変動予測 |
| ガソリン | → | -4.4~-4.9 |
| 灯油 | → | -4.4~-4.9 |
| 軽油 | → | -4.4~-4.9 |
| A重油 | → | -4.4~-4.9 |
| LSA | → | -4.4~-4.9 |

※原油コスト「+1.5~+2.0円」
 ※激変緩和補助金「-38.5円」前週比-6.4円
 ※現時点での予測です。

【製品卸価格】

《今週》今週の元売り仕切り改定は、3社ともに原油コストは「+1.0円」、補助金は、「-32.1円・30%」、都合「▲0.6円」の値上げ改定となりました。資源エネルギー庁の公表する全国レギュラーガソリンの25日時点の小売価格平均は180.5円となっております。

《9月30日以降》次回の元売り改定は、原油コストは「+1.5円~+2.0円」、激変緩和補助金は「-38.5円・60%」の見込みで、都合「▲4.4~▲4.9円」の改定の予測となっております。

【次世代エネルギー】<ヤマト運輸、小型EVトラック900台導入 三菱ふそう開発>

ヤマト運輸は、小型の電気自動車(EV)トラック「eCanter(eキャンター)」の新型モデルを約900台導入すると発表した。最大積載量は2トンで、航続距離の短いラストワンマイル輸送に活用する。2024年3月までに全国で順次投入し、温暖化ガスの排出削減につなげる。新型車両は三菱ふそうトラック・バスが開発した。従来型に比べて小回りが利くよう改良し、街中での集配に対応しやすくなった。約8時間の通常充電で116キロメートル走行できる。荷台には常温・冷蔵・冷凍の3室を備えた。購入価格は非公表としている。ヤマト運輸と三菱ふそうは、新型EVトラックの説明会を群馬県高崎市で開いた。ヤマト運輸の長尾裕社長は「EVの導入に適したエリアを優先しながら充電器の設置などを進めていく」と説明した。同社が2トントラックのEVを導入するのは初めて。eキャンターは世界初となる量産の小型EVトラックとして、三菱ふそうが17年に発売した。従来のディーゼル車に比べて振動が少なく、ドライバーの身体的な負担を減らせる。ヤマト運輸は旧型のeキャンターを宅急便などの集配向けに一部使っている。ヤマトHDは温暖化ガス排出量を50年に実質ゼロとする目標を掲げる。配送車のEV化を進めており、30年までに2万台導入する計画だ。足元では約5万5000台ある保有車両のうちEVは1000台程度にとどまる。充電インフラの普及状況などを見ながら、EVを増やしていく。